

# モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



## シャークスフィン (Shark's Fin)

つい先日の話だ。スムロンとNOC C (カンボジアオリンピック委員会) の年次総会に出席した。背広を持たない僕は、もはやレトロといえるバタゴニアの半袖シャツ一枚でクーラーの猛攻撃に晒され、気分は厳冬の奥三ノ沢にいた。そのとき僕はドジなことに寝袋なしでピバークしなければならなかったんだ。総会の終盤、長いスピーチに入っていたNOC Cの

トップに見覚えがあった。12月の国際ハーフマラソンでも演壇に立ったひとだ。その肩書きには観光省大臣と併記されている。それで、昨年末に、カンボジア最大の石灰岩地帯であるカンポットの岩場で起きていたことを思い出した。立派な岩壁が秩父(関東)の山みみにセメント会社に削りまわられている。山の無い国だし、内戦後

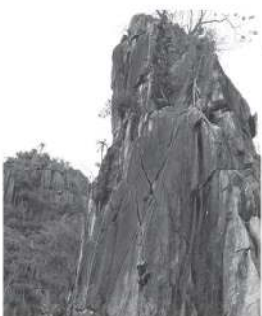
ない。しかし、抜さん出た鋭い岩峰にシャークスフィンが、無惨に破壊されている周囲から浮き出るように残っていて驚かされた。スムロンは、得意満面。NOC Cは観光省と繋がっていて、クライミング保護の指令が出たのだとまことしやかに言った。カラオケ屋が単に背景の映像を残すように言っただけだろうと、僕は思うけれど。

さて、2006年10月、僕はポテト(写真参照)と海辺の町カンポットにいた。夕方遅く、僕にびつたりのおしゃれな(すみません)レストランでアツプルバイを頬張っているとベンがひよいと現れた。翌日、コンポントラッチの岩場でベンはポテトにクライミングを教えた。金魚蜂のような地

## 目指せ、 アンコールクラライマー誕生!!



コンポントラッチのクロイスターウォールで。初めてクライミングをするポテト(右)にクライミングシューズやロープ、ピレイデバイスについて、日本のガイドからは聞いたことのないような素敵な説明をしていたベン。ポテトは無論ニックネームで、彼女は体育教師として2年間日本政府から派遣されていた。女子100mで某県大会優勝経験のある陸上競技選手でシムリアブでは僕らと家族のように接していた。現在一児の母となりクライミングとはやや距離を空けている。カンボジアでクライミングを始めた最初の日本人だ



シャークスフィン正面壁の三ツ星クラックルート「ZEN-X」(5.10b)を登るトモ(本連載中登場予定、紹介はあらためて)。周囲の岩壁はセメント会社のダイナマイトで破壊され、この一帯ではわずかにここだけが残されている。ダイナマイトの作業員に聞くと、シャークスフィンだけが観光省からストップが掛かったのだという。カラオケDVDの背景になっているのも事実だが、それなら他の岩塔も守られて然るべきなのでスムロンの仮説も一蹴はできない

僕らは車で、薄暗くなった海岸線の道路を辿った。銃撃の弾痕が無数に刻まれた空き家の前を通る。ホーチミンルートは少し離れているがこの辺りも激戦地だったらしい。脳裏にかすかな渦が生まれた。浜に面した素朴なレストランで茹海老を注文したら目の前を奇妙なトラックが通った。でも一体何が奇妙だったのだろう。この旅の後、長年の友人となる運転手のケーが言った「ポルポトの時代に彼らはとてもひどい目に会いました」。歴史の黒い渦が脳裏でぐるぐる廻り始めた。何も知らない僕は急に恥ずかしくなった。トラックの荷台には黒い布で顔を隠した女性が大量乗っていたのだ。